

ロバート・ブラウニングの悲劇「ヴィクター王とチャールズ王」

三 谷 正

- (A) 前篇「ヴィクター王」
 - (→) 序
 - (一) チャールズの煩悶と妻ボリゼナの激励
 - (二) ヴィクター王と大臣ドルミア
 - (三) (1) ドルミアと王の情婦セバスチャンの陰謀
 - (2) 権謀術数に關ける好一對の王と大臣
 - (3) チャールズの爛眼
 - (4) ヴィクター王の強引な欺瞞的退位
 - (四) チャールズの王位受託とそれをヴィクターの毘と見抜く妻ボリゼナ
 - (B) 後篇「チャールズ王」
 - (→) チャールズ王の留守に乗じての老伯ヴィクターの王座奪還策の失敗
 - (二) 再度の王位奪還謀略の破綻とチャールズ王の英断
 - (三) 王位を放棄しようとするチャールズ王と断固それを保持させる后ボリゼナ
 - (四) 捕縛した父へのチャールズ王の讓位と喜びのあまり急死する老伯ヴィクター
 - (五) 結び
- ロバート・ブラウニングの悲劇「ヴィクター王とチャールズ王」

(但し(B)後篇「チャールズ王」は次号に掲載する)

(一) 序

この劇は時を一七三〇年と一七三一年と大きく分け、更にそれを細分して四部とし、場所をタリン〈Turin〉城とリヴォリ〈Rivoli〉城の王城一円とし、事件を王位継承の紛争とした史劇である。主人公ヴィクター王〈King Victor Amadeus II〉は十歳の幼年にしてサヴォイ公〈Duke of Savoy〉となり、年長じてサルジニア王〈King of Sardinia〉となる。六十四歳のとき、突然もう一人の主人公次男の王子チャールズ〈Charles Emmanuel〉に王位を譲ろうとする。長男の王子フィリップ〈Philip〉が病死していたので、退位となれば次男のチャールズに譲ることは当然であるが、今俄かに退位を言い出したことに、チャールズは面喰うのである。王の退位の理由とするところは老令のため国政が疎ましくなり、余生を閑居のうちに過したいとのことである。しかし王の性格の未だ猛々しく、大胆さも残っていたので、その理由は誰しも納得しかねるものである。余生を閑居に過すと王は言うも、後の亡き後、王は窃かにセバスチャンを寵愛している。しかもかの女は王と結婚し、王との間に子が生れると、それを王の後継者にしようとする王を唆かしている。また亡くなった長男フィリップは王に似て勇猛であったので、王は長男を愛していたに對し、次男チャールズは兄ほどの武張った処がなく、寧ろ温厚従順で王の気性に合わず、王は次男を極度に嫌っている。このとき突然王が退位を口にしたのである。チャールズの面喰うのも当然である。ここに父の性格を知悉するかれは、父に何か企みがあると推察し、王位を拒む決心をする。実は、王の退位の真の理由は、外交に失敗したため、その責任を王子に負わせ、自らへの人民及び外国の非難を避け、ほとぼりのさめる頃、再び王位につくというのであった。この企みには王の大臣で権謀術数に闇ける侯爵ドルミア〈Marquis d'Ormea〉及び野心を抱く王の情婦セバスチャンも参画していた。チャールズは三人の企みを見抜き一度は王位を拒む決心をするものの、生来孝心強く、父の政治上の不名誉を恢復することは子の道と考え、心ならずも王位を継ぐのである。そして誠心国政に努力し、外には善隣外交に成功し、内には民意尊重の善政により、王国を救うに到った。これを見た王は企み通りに王位復帰を計る。チャールズはこれを聞き、且つは父が外国の援助を得ての画策なるを知るや、已むを得ず父を反逆者とし逮捕する。しかし父の王位へのあまりにも強い執念の声を耳にして、父を哀れみ、持前の孝心から処刑寸前に父への譲位を告げる。父は子の心情の急変に衝撃を受け、喜びの急死をする。これがこの劇の荒筋である。この劇は十八世紀前半の英雄

悲劇によくある血で血を洗う流血の生臭い権力争奪の血縁の争いという紋切り型の悲劇でなく、寧ろ十八世紀後半の感傷悲劇に近い。また王の情婦の野心、大臣の権謀術数が王を操る処はエリザベス朝浪漫劇のお家騒動的の面がないではない。しかしそれも単に陰謀だけで、流血の惨はなくチャールズの孝心による父王の善びの急死となっている処は、血腥い浪漫悲劇でもない。また父王の善びの急死の点を把えると当時流行の甘ったるい感傷的メロドラマに近い点もある。しかしこの劇を内容的に把えると今日の家庭悲劇である。ただこの劇の人物が庶民でなく封建時代の宮廷の人間である点が異なるにすぎない。人生の価値観の相違から生じる親と子の確執の問題という点からは確かに家庭悲劇である。ここに私は父王とチャールズ王の人生価値観の相違性と、それぞれと行動を共にする大臣ドルミア並びにチャールズ王の後ポリゼナ(Polyxena)の織りなす宮廷の人間模様の種々相を眺め、この悲劇特有の哀愁の情緒を台詞を辿ることによって鑑賞してみたいのである。

(二) チャールズの煩悶と妻ポリゼナの激励

チャールズは父がかれを嫌悪するので憂鬱な日々を送る。妻ポリゼナは忍耐の肝要を勧めて慰める。しかしかれは言う「思い出してみると、世間は父と兄ばかりを重宝し、僕を無視し、僕は皆から締め出されていた。隔離の場所から窃かに覗き見たのは、人民の凄まじい歓呼の叫びと輝く旗の下に威張る父と兄の姿だった。父と兄はイギリス、スペインと誼を結び、フランス、オーストリアと戦を交え、戦勝し武人的誇りに夢中だった。僕は一瞬冷笑し窓を閉めて言った。『僕は除け者にされた』と。……やがて獅子のような容貌の勇敢な兄が突然死んだ。……でも兄が継ぐ運命にあった厄介な王位の仕事なんかしたくはなかった。しかし王家の次男と生れ、兄が亡くなった以上、僕は王家を継がねばならぬと覚悟した。その時まで父は父らしい父と僕には思っていた。厳めしい公爵という感じはなかった。所がその後、間もなく、僕が愚か者との噂が流れ、それが僕の耳にはいった。皆の僕を見る態度は軽蔑だった。更に皆はこう陰口も言った『公爵はあんな王子と一緒に仕事が出来たのか。長男の王子は堂々と公爵と共にタリン城下に馬を駆る頼もしいお方であったのに』と。やがて父にも人民から不評を買った。そこで父は相続者を僕で辛抱しようと考えた。僕は僕の将来の役割を知り、僕の神経を磨り減らす気苦労や非難が現われ出し、悲しくなった。それから後は、春の鳥の鳴き声を耳にしても、花の香りを嗅いでも、閉じ込められた薄暗い宮廷の一室でどんなに僕は眩暈のする感を覚えたことか。母の顔付で知ったのだが、父と母は僕の愚鈍に就いて話していた。だが勇敢な兄を亡くし、僕に失望を感じている両親の淋しい思いを知っ

ていたので、僕は辛抱して黙って聞いていた。思えば兄は国政の書類を楽々と書いたのに、僕はそれを書くのに苦心惨澹だった。それでもその頃の父は僕の懐かしい父だった。僕は言った『父の全生涯は一つの目的への数え切れない努力の継続である。それは公爵の地位から王の地位に登ることだ。それで子供に目を向ける暇がない』と。しかし父が公爵から王となれば、僕を構^{かま}ってくれるようになると思った。母が亡くなってからは、愛の対象は僕だけだから、僕を吃度愛してくれると切^きに思うのであった。父が王になると無情が倍加するなんて夢想だになかった。……然るに最近の父はあまりに無情だ。僕はどうすればよいかを教えてくれ。僕は参^{まゐ}ってしまいそうだ。父は僕をどうする気だろうか。人民が僕に望んでいるのは何だろうか。父の情婦と父の大臣を僕の傍に置いて父は何をしようとしているのだろうか。そなたは僕の悩むこの姿を見、父の言葉を聞き、僕と父の判断をしてくれ⁽⁵⁾』と。妻は何事も辛抱が大切、妻自らも今は我慢すると慰める。しかしかれは続ける「そなたは我慢すると言うのか。そなたが僕のために沈黙を強いられ、その間に、そなたが僕の傍で少しづつ朽ちて行くのが僕に分からなくても思えるのか。もしそうでないとしてもこの恐ろしい宮廷から這い出す穴を止められたらどうするか。あの大臣は僕を突き飛ばし、あの情婦は僕を毆^うにかけようと番兵を置く。こんな生活をしている間に、僕は年を取ってしまう。僕は僕達のことには不注意であってはならぬ。僕達が互に疎遠になってはならない。僕は生活を変えねばならぬ⁽⁶⁾』と。これに對し妻は言う「今日は父上にお目見えなされることが賢明ではありませんか。今、タリン城では何かが進行し、使いの者共が城外の大通りを互に陽氣を競いながら続くのは何故かを考えになることが大切です。黒衣と銀の十字架を身につけた大司教の従者も見ました。あんな華麗な行列は何かがありそうな予感がします。あなた何か心当りありませんか。何か重大な事件のような気がします⁽⁷⁾』と。かれはドルミアが何かを企んでいる口吻を漏^もらして言う「僕に関係ない。……宮廷の物笑いになりながら、ぐずぐずしている僕の味方することの馬鹿げたことは廷臣の皆が口にしてゐる。（かれは下におろした書類を指して）これもいやな仕事だ。（妻はその書類を調べる）無論、昨夜調べ、三つの言葉の内容が分かったんだから全くのいやな仕事というわけでもないが⁽⁸⁾』と。すると妻が言う「気のお弱いこと。その書類はたった今此処へお出になる時、その内容を繰り返しお読みになっていた領土縮小に関する演説を綴じ込みなされた書類でしょう。それがどうなんです。あなたがそれを読んでおいでの間、あなたのお話の調子は全く父上と同じでした。……そしてその演説の中にはスペイン国の要求に就いての私の意見もはいつています。あなたは領土に関する演説に於いては全く熟達されておいでです。ですからよろしいですか（書類を見て）こちらの方はあなたが述べられた意見です。ちょっと待って下さい。ではゆっくりと上手にもう一度私に

読んで聞かせて下さい。読んで下さい。そうです。あなたの生地のままの調子が出ています。あなた毅然として相手の顔を見据えて声高くお読みなさい。気落ちなんかしてはなりません。そうです。その通りです。さあ『もしスペイン国が要求すれば——』お始めなさい。私の顔を見てお始めなさい」と。するとかれは言う「そなたの顔を見てと言うのかい。ああ、その顔はあの時の顔そっくりだ。そなたが王の軍隊の配置換えをしたり、或は王の重臣会議を解散させた時の顔そっくりだ。あの時、重臣共は無念の涙を飲み、手に顔を埋めて、扉を少し開け、のっそり出て行った。その時のそなたの顔は耀^{かがや}いていた。あの顔に、僕は、僕にも王冠が廻^{まわ}って来る可能性を突然見たんだ。今でもあの時の王の顔が見える気がする。あの時、王は小さい声ではあったが『よくぞやったぞ』と言わねばかりに僕の心をすっかり掴んでおいでであった。そなたのこの美しい額^{でい}の下で、これほど僕の心を晴れやかにするものはなかった。それに引き換え、セバスチャンの恥知らずの唇、いや、それよりももっといやなドルミアの白髪、死人のような青白い顔、悪企みのために段々と小さくなって行く目などのいかに不快であったことか」と。かれはかの女に接吻する。この時ドルミア登場。

三 ヴィクター王とドルミア

(1) ドルミアと王の情婦セバスチャンの陰謀

ドルミアは王に上申した外交政策が失敗したため、王の責任を転嫁し、自らも責任を逃れようと、王子への一時的譲位を王に進言する。しかし自らと王の情婦が王子を愚鈍と人民に煽動しながらも、王子の外柔内剛の賢明さと妻ボリゼナの男勝りの只者^{ただもの}でないことを知悉するが故に、進言の可否に迷っている。然るに王は早速退位に踏み切り、王子を呼び寄せるため、ドルミアを王子の下に遣わす。ドルミアは王子の手に持つ外交文書を見て、かれ流の狡猾な受け答えをするうちに、悪企みの図星^{すばし}を指され慌てて、王子が王に会う前に一つの進言があるとして、王子の疑惑の念を取り去り王位受諾へと心を動かそうとする。即ち王の内政の失敗と外交の蹉跎^{さた}を述べ王子の王位受託の機会であることを言葉巧みにもちかける。王子は大臣の悪企みを承知しながら、苦悩の父を救わねばならぬと決心し、父に会う約束を大臣にする。そこで大臣は急転^うその場を去る。大臣の去る様子のあまりにも得たり賢し^{あや}の怪しげな態度を見た瞬間、王子は父に会う決心を翻^{ひるがえ}し、父には会わないと次のように妻に言う「そなたは大臣の目と父の情婦の目から逃げることを望まないか。僕と一緒に宮廷を離れ幸福な生活することを望まないか。かれらは僕を

追放しようとしている。騎士達が集っているのはそのためだ。この頃皆の者がひそひそと話をしたり、密室に閉じ籠もるのもそのためだ。ずっと前から皆が僕達に粗暴な振舞をしたり、横柄にするのもそのためだ。……そなたはかれらの巧妙な陰謀が掴めないか。ここ二ヶ月その陰謀に必要な知恵を皆に植え付けていたのだ。大臣が今、此処に來たのもそれを証明するよ。……永い間の陰謀が、今大臣の來たことと絡み付いているのをそなたは認めないか。……今は王冠は安泰だ。しかしやがて王冠を辱かしめる時が来るのを僕は恐れている。それは前からの僕の不満の種なんだ。父の目に僕よりも適う奴、情婦の子のために、僕の地位を横領するのがかれらの狙いなのだ。……かれらは王子の僕の王位継承権を辞退させようとは表向きにはなし得ない。しかし僕を愚鈍と言ひ触らし、僕にちくちくと針を差し込み、僕が王位継承の表舞台に出たくなないと僕に、僕の口から言わせ、僕が国政に参与することを諦めさせ、王位継承問題に決着を付けようとしている。要するに、かれらは僕が国政に不向きだからと僕が申し出て、僕の権利を、僕自身に投げ出させたいのだ。……だが僕はこの際、僕の継承の権利を、情婦の手から王の手に回収すべきことを王にはっきりお伝えしようと、今、そなたにこう話しているこの瞬間に思いついたのだ」と王に会うことを差し控えると言った前言を取り消すのであった。妻は大臣の言葉を真に受けていたので、大臣及び王の情婦の企みがどうであろうと、王の意図を悪く推測することはよくないと反省を促す。するとチャールズは「そなたはこの宮廷の華麗なために敢えて宮廷を放棄しないと言うのか。世のすべての人から輕蔑されているこの僕にそんなことが言えるのか。どうだ返事しろ」と憤る。夫の憤懣のこの強い言葉に、男勝りの妻も夫の苦悶が胸に込え、夫に対する情愛が俄かに沸き立ち「私の優しい夫のあなた、私は申します。あなたの信じられる通りに事態は事実となるでしょう。もう一度確かに申します。あなたのなされねばならぬことは支配を断念なさることです。それは何と幸福なことでしょう。あなたとだけ生き、あなたとだけ死ぬことは何と仕合せなことでしょうか」と。これに對しかれは言う「では王の前に行く。今頃は大臣が王に知らせている。王は僕に国事を暗示する。そして僕に手応えがないと見て僕を愚かな奴と思う。それは、王が閣議で僕がどんな人間かを説明する言葉より一層役立つ。永年、僕が生きた心地がしないのはこういふ事のためなんだ」と。妻は言う「それはそうでしょう。もし王があつた女と結婚されるなら、かの女の子が正常な王位継承者となるでしょう」と。かれは言う「そなたもそう思うか。王は王の思うようになさるがよい。愛するそなた、そなたは僕を信じていたことを後悔しないだろうね。遠方だけれど、ピードモント Piedmont にはリヴォリよりも明るい処が沢山ある。僕は父に会おう。僕が父にどんな風に僕の心を打ち明けるかを聞いてくれよ。今度は吃度声を大にして毅然として言うよ。今にそなたの国ライン・ランド

「Rhine-land」へ行ける。僕のこの氣持誰に分かるものか。そこへは一度行ったことがあるね。今度は永久に行くよ。そこではいよいよ生きた心地がするよ」と。妻も「私もよ」と。かれは「僕のポリゼナ、さあ行こう」と。

(2) 権謀術数に關ける好一對の王と大臣

ヴィクター王はレガリア「regalia」(王位のしるし)をクッション「cushion」に載せて登場し怒鳴る。「廊下に列を作る名も知れぬ家来共の居並ぶ中をこんな風に歩くのは我慢ならぬ。広間で待機している騎士だけで充分だ。ドルミア、わが息子は何処にいるか。黒い色の冷たい面をし黙って立つ家来の奴共が、王冠の火の玉(火の玉のように萌える王冠の飾り)にちよつとでも触れるものなら、忽ち爆発し、何もかも飛び散るぞ、永年わが王家を凝視して来たこの王冠、流星のように輝き、サイプラス「Cypus」、エルサレム「Jerusalem」、英國のいずれの王冠にも劣らぬ素晴らしいこの王冠、わが先祖は求めながらも、それを得ず、青ざめ顔で死んで行き、このわしが初めて掴んだこの王冠、この王冠に名も知らぬ彼奴等が触れれば忽ち飛び散ってしまうぞ」と空威張りする。しかし外交上の失敗は事実で隠せないで、その責任を息子に負わせ一時的退位を決し此処に來たのである。王は大臣に自らの退位と息子の即位の式の準備を命じる。即ち先ずヴィクター王の即位の誓言書の失効をドルミアが読み、その後にはチャールズズの即位の誓言書にチャールズをして署名させ、デル・ベルゴ「Del Berio」に証書を読ませる。そこへヴィクターが現われるという段取である。しかし大臣ドルミアは反対する。王は大臣のずるい心を見抜いて言う「あの大きな町トローロン「Toulon」の町が、ずるい策略を用いてお前のカバンに金をどっさり詰め込んだ。その後、お前は行方を晦ました。それから間もなくあの町を焼き払ったのだ。比喻でお前のことを言ってみればこうなんだ。……これをお前の立場に適用して見る。お前はわしの大臣だ。わしの次の地位にいる。いやひょっとしたらわしの上かもしれん。わしは悲しい立場にあるというもんだ。わしには大変な警戒が必要なんだ。心の安まる時なんかない。誰が好き好んで王という高位なんかをいつまでも望むものか。所がお前は大臣の地位を得るために、今迄魂を打ち込んだ。そしてその地位を守ろうと懸命になっている。今後ともそうするだろう。波がわしを連れて退いたらお前はどうかするか。しかもその波がお前を別の波頭の上に置いたらどうかするか。わしはお前にわしの息子を投げ与える。お前はそれを乗せて嵐を乗り切って行け」と。こう言われても臍に傷持つ身なるため輕蔑されたと言いながらも、王の命令に従い、王子の熟慮あるのみと諦める。その時チャールズズ登場する。

(3) チャールズズの炯眼

ロバト・ブラウニングの悲劇「ヴィクター王とチャールズ王」

大臣は王子に話しかける。王子は王と大臣の間に企みのあるを察し、よい気持がせず、強い口調で大臣にその場から去ることを求める。王子の語調の激しさに王が呆氣にとられている時、王子は一つの書類を見せながら王が呼んだのは昨夜の結果のためかと尋ねる。王は驚いて「何だと。昨夜何があったと言うのか。お前の言っていることは何だ。結果とは何だ」と言う。王子は答えて「これは疑もなく、父上のご嘲笑に相応しいことを証明しています。父上を尊敬する者なら見抜ける筋の通らぬ考えです。これは筋は通りませんが正気で書かれたものなんです」と王と大臣と情婦の悪企みは分かっている（引用文⑮のこと）ことを仄めかす。王は企みの見抜かれたことを知り「六十四年間の王座はわたしには重荷だ。わたしは死ぬ前に静かな生活をしたいのだ。そのためにお前を呼んだのだ」と讓位を告げる。これに対し王子は言う「父上はいつも私を憎まれました。私はそれに堪えました。父上は私を侮辱されました。それも私は堪えました。今、父上はご自身を辱しめていらっしゃいます。私が父上を信じていたことと、父上がどんなお方であるかを私は思い出します。……しかし私はご存知のように苦しみました。父上は次から次へと小賢しい策を色々とめぐらされました。私には何もさせず、閑人へと追い込まれました。それは私を馬鹿であることを証明するためでした。私は悩みました。それでも父上のやり方を甘受して参りました。今、私の愚かさを、また試そうとされています。どんな試しをなさろうとされているのですか。……私が分からないですって。では私が、今、私のお人好しに就いて訴えるまで待つて下さい」とはつきりとは父を名指さないで暗示的な言い方で、チャールズが王冠を得ようと企んでいるとの噂をでっち上げてかれを陥れようとしての企みのあることを述べた後に更に言う「私共が何をし、何をしないかなんて誰に分かるのですか。さあ策をめぐらし世間をあつと言わせなさい。控えの部屋に衛兵がいるのでしよう。また私を捕える大事な罠を仕かけている従者共もいるのでしよう。かれらに問いなされ、かれらの息子共が、かれらの父の地位を羨望していると思うかどうか問うてみなされ。こう言えば私の心がお分かりと思えますが」と。これに答えて王は「それにしてもお前はわたしの心をよく知っている。それじゃ、あっさりわたしの意に従え。この会議はわたしが召集したのじゃ」と。すると王子は「おっしゃって下さい。あの女も関係しているのでしょうか。父上だけがこの計画の考案者でなかった筈です」と言う。王は「お前、もっとわたしをよく見てくれ。わたしはこういうことで決して冗談なんか言わぬぞ。見てみる。騎士共が、わたしが権利を譲り、お前がサルジニアの王冠を受けるのを見るために集るぞ」と。王子は「左様なら。私の心を変えることを望まれても無駄です。私はこの話をお終いにしたいと思えます。私が世間の表面から身を隠しても、私が父上のものであることをやめるからではありません。いざという時には私は父上のために死にます。しかし今此処で父上を煩わしたく

はありません。左様なら⁽³⁸⁾」と言う。

(4) ヴィクター王の強引な欺瞞的退位

この時大臣登場。父子の話を盗み聞きし、王子は罫にうまい具合にはかからぬと慌てる。王は突然王子の頭に王冠を置いて言う「ドルミア、お前の王だ。わしの子よ、わしの言うことに従え、チャールズ。お前よりも目のよく見えるお前の父が、これはこうでなければならぬと決めたのだ。これがあるべき真実の姿なんだ。それに就いての理由はあとで言う。しかし今はわしの言う通りにせよ。わしを信じてくれ。おや、息子は気絶したかな⁽³⁹⁾」と。王子は王冠を無理に突然頭に置かれ、驚きのあまり一瞬気を失う。これを見た大臣は内緒話のように言う「殿は⁽⁴⁰⁾どうしても譲位に固執されますか⁽⁴⁰⁾」と。王は答える「そうだ。だがわしの表向きだけの譲位の意図には変りはない。これは本当だ。あの子はお前を嫌っている。どうしてかな。チャールズ、元氣を出せ。氣が付いたか。ではドルミア、新王に今此処でなすべき手続きのことを言え。一刻の猶予もならぬぞ。デル・ベルゴ、退位の条文を読め。そしてお前は署名せよ。それが済めばわしも署名する。一切が終り次第わしの処へ来い⁽⁴¹⁾」と。ここで大臣と王子退場。王は独語する「あの子は妙な顔をしたな。わしが恐れていたことをあの子は言った。あの真剣な調子はどうか。わしの言うことは全く本当だと言ったかと思うと、またわしの真実は見せ掛けだとも言った。あいつの言うことはみんな当たっている。あの顔で、あの声で、わしのすべての目的を当てていやがる。わしはあいつの言うのがまだ耳に残っている。……だが、わしが落ち目になった時、あいつはわしの味方の者をわしに背かせて、わしのすべての策を失敗に終らせるかもしれない。わしはそうはさせぬぞ。わしは子供の遊びみたいなことはせぬ。失望落胆なんかはせぬ。わしがもう一度王冠を望んでいるのを、十字路で嘲笑しわしに振り向くチャールズなんかあってたまるか⁽⁴²⁾」と。その時、大臣の登場を見て王は言う「チャールズ王万歳、いやチャールズ王の大臣万歳か。もう済んだかい。ドルミアわしは冗談を言ったかな⁽⁴³⁾」と。大臣は「チャールズ王ですって。では殿は何におなりになるのですか⁽⁴⁴⁾」と問う。王は答える「何にでもなるぞ。田舎紳士になるぞ。忙しい仕事から解放されたチェンバリー⁽⁴⁵⁾〈Chambery〉に急いで引退し、鷹狩をする。お前が、わし無しで仕事が出来るように騒々しい奴等を残してやるぞ。わしはレモン⁽⁴⁶⁾ト〈Renont〉伯にでも、テンデ⁽⁴⁷⁾〈Tende〉伯にでもなる。兎に角小さな館の伯爵になるのだ⁽⁴⁸⁾」と。大臣は言う「では殿、殿は、殿がフランス軍を打ち破られたストラファルデ⁽⁴⁹⁾〈Straffarde〉の戦場のカティナット⁽⁵⁰⁾〈Catinat〉に對抗された勇敢な指揮者も、またフランス軍を打ち破られたタリン城の公爵も、サルジニアの王もやめられて、今は小さな館の伯爵ですね。……殿は最初に王冠を授けた

ロバト・ブラウニングの悲劇「ヴィクター王とチャールズ王」

神への誓いを破られるのですか。今迄殿を王と崇めて来た人民への誓いを破られるのですか。それは神及び人民を憤慨させる最も不道德なことと思われれます。私が一切を承知しながら王子に隠してきたことが人民に知られてしまっています。すると人民は、私が王を広大な宮廷から小さな館の伯爵に滑り落とした大の不道德者であると叫び騒ぎ立てます。そうなれば新王は吃度私を捕えて処分されます。でも私は殿の今のお言葉は勘弁いたします。なぜならこの結果は私には分かっていますから。殿は王位にお帰りになることが目に見えています。殿は吃度王位に帰られます。殿が息子さまを信じられるのは一瞬だけのことです」と。王は言う「息子を信じるとな。それがどうしたというのだい。哀れな奴め。お前も唯の大臣かい。お前はもっと物の分かりのよい奴と思っていたのに。わしが息子を信じるのが何処に誤りがあると言うのか。……あつは、ドルミア、お前の知識の宝庫にこれ以上の抜目のない策でもあると言うのかい。……息子を今刺戟することは適切ではないぞ。あいつの糞真面目な行為はすっかり忘れることだ。ほんのちよつと時が経てば貴族共を呼び、息子の捨てたがっている権力をわしに与えるように取り計からせたいのだ。安心しろ。だが今はわしはテンデ伯でも、その他お前の好きな何処の伯爵にもなるぞ。これはお前の勧めた策じゃなかったのかい」と。しかし大臣は尚も執拗に言う「でも王が退位されれば、新王は人民によって檻棲切れのように放り出され、外国の騷りものにされるに決っています。殿のこの不信の行為によって、殿は、殿の今迄のご成果をすべて絶滅されますよ」と。王は「わしの復位の邪魔が何かあると言うのか」と問う。大臣は「殿の復位は今でも邪魔されています。私の言葉を疑って、亡命に等しい退位に不思議に魅力を感じられることは殿を窮地に陥れることになります」と答える。王は言う「ほう、お前はわしが後悔すると言うのかい」と。その時、部屋内部でチャールズ王万歳の叫びが起る。大臣は言う「後悔されましたか」と。王は言う「わしは皆を待たせておいたのだ。入れ。退位式を完了せよ」と。

(四) チャールズの王位受託とヴィクターの罠

舞台は変り、ポリゼナ登場。かの女は独語する「歓声があがるわ。チャールズは追従者にちやほやされて満足する方じゃないわ。ああ、これはイタリヤ式だわ。これはチャールズが好き好んでされた結果ではない。それとも私の病的な幻想かしら。でも矢張り事実だわ。今迄もこのような事がありそうな準備が着々と行われていたわ。ヴィクターは自らの母親を投獄したんだわ。ヴィクターは吃度自分の息子の権利を奪う方法を考えているのだわ。私達のなすべき義務は私達にはよく分かっている。私の夫は悪企みをする王や、一部の取るに足らぬ人民のために存

在するお方ではない。そうあって欲しい。私のチャールズ、かれらから離れて安全な処に来て下さい。私達の生活は人民の前での眩しいものではありません。私は権力があなたの運命となることなんか夢想だにしません。あなたは権力から閉め出されておいでなのです。……忍耐、献身、不屈の精神、純真、誠実一路こそあなたのものです。これらの徳はかれらの持ち合せない徳なのです。ただ怒号するだけがかれらの能なのです。今こそ私の仕事が始まります。悲しみからあの方を救う私の仕事が始まるのです。チャールズを悲しみから救えるかしらん。あの方、何と気高い方でしょう。あの方はイタリア人のように生れておいでではない。あの方はドイツ魂でできているのです」と。そして尚も幻想に耽る。その時、チャールズが王冠を戴いて登場。かの女は王冠を見て問う「これは何のです。答えて下さい。誰がこんなことをしたのです。答えて下さい」と。チャールズは「ヴィクターだ。僕は王なんだ」と答える。妻は驚いて言う「ああ、いけないわ。いけないわ。すべてのものの中で一番いけないわ。言って頂戴。何んですって。ヴィクターですって。かれがあなたを王にしたですって。ではかれは今何ですの。このあとどんなことになりますの。あなたが王ですって」と。チャールズは言う「静かにせい。新しい世界が僕の前に明るく開くんだ。ヴィクターはかれの身体にあつた暗い姿から、そなた同様に僕を支えてくれる明るい姿に変わったんだ。僕は運が上向いて来た。いよいよ上向いて来た。僕はサルジニア王となったんだ」と。そこで妻がヴィクターの退位の理由を問うに對し、新しい国の困惑が生じ、それをチャールズが解決できることを父が確言したことを伝える。すると妻は「ではあなたの在位をつづけさせるつもりかしらん。その期間はいつまででしょうか」と問う。チャールズは「在位期間って。僕の前に立ち塞がる危険を僕が恐れてでもいると思うのか。父は人民の面前で僕を褒めたのだ。僕の人民の前でだぜ」と答える。妻は言う「では父上はお変りになられたのね。ご親切になられたのね。でも何処かに罠があるわよ」と。でもチャールズは言う「心の底から僕は誓ったよ。僕は父上が獲得された王冠を守り通しますと誓ったよ」と。そこで妻は言う「そうです。では今迄心配なさいたことがすべて、あなたの前にはつきりしたとおっしゃるのね。私のチャールズ、あなたは王になることを喜んでおいですのね」と。稍不安ながらも夫の気持ちに同調する。しかしかの女は独語する「あのような心の人が国を支配するとなれば、人民にとって素晴らしいことに間違いないわ。でも私には罠があるように見えて仕方ないわ」と。その時、ヴィクター登場。それを見てかの女は心の中で言う「これは吃度王が正体を現わずに違いない」と。王は口を切る「到頭、老人の愚かな愛が仮面を落としましたわい。有難いとなんか言いなさんな。わしはあんたを知つとりますわい。あなたポリゼナを知つとりますわい。チャールズいるでしょうね。わしは今かれに招かれたんです。坐れと言

って下さるかい。やわらかい髪の毛の青い目をした息子は、わしが遠いチェンバリーへ行っても、わしを忘れないに違いありませんわい。尤もわしは王としては、ろくに政治に励まず居睡りばかりしてはいましたがのう」と。ポリゼナは言う「大変に有難く存じています。尤も感謝の言葉も差し上げかねていますが、これも父上がチャールズに是非お話しなされねばならぬことの邪魔をするのもいかがかと存じた次第でございます」と。そこでチャールズが父の用向きを尋ねる。父は王国の領土の広いこと、この領土を治めるには武器の大事なこと及び武器の器用な使用法などを注意し、更に政治運営の要領として、王たる者は父が見せたように臨機応変、しらばくれること、ずるく立ち廻ることを口にする。この最後の言葉がチャールズの氣に障り、かれは「誠実を助けとし、誠実と共に勝つか死ぬかします」ときっぱり言う。すると父は言う「お前は戦士に創られていないが国境だけは守ってくれ。……わしはいやな政治からの免除を確実に得たいのだ。わしは息子や娘達とお喋りをする特権を得たいのだ。目下のところヨーロッパはどここの国も動くうとしないからな」と。そこでポリゼナが言う「それにしても、父上、そんなに早く遠く離れたチェンバリーに行っておしまいですの。では左様ならですわね。速く過ぎ行く幾年を充分お仕合せにお暮らしなさいませ。このままお別れしますのは、まるで死のお別れのように悲しい思いがいたします」と。しかしかの女は内心では矢張り罨があるとヴィクターの顔を見守りながら夫に言う「父上はあなたが父上のために政治をするなど思っではいられません。あなたが全く関心をお持ちにならないのは人民なのです」と。夫は言う「人民は今では僕の味方だ」と。すると父が言う「人民のことか。そのことに就いては、ちよっと前に手を打っておいた。お前も少しはわしの採った手段のことは知っていると思う。これは貴族にも影響することだ。わしは交付地を回収し、一、二の税を課したんだ。要するに、こういった事に就いては民衆がいくら騒ぎ立てても用心することだ。わしを見習うがよい。お前に任せられたことは少しも譲ることはならぬぞ」と。チャールズは言う「父上、私が誓いをした時、私の目は父上を求めて、きよろきよろしていましたが、父上が私に求められたことには耳を傾けよく理解しています。私は神に約束しました。『神がこの高座から私を動かすまでは、私はこの高座にとどまります』と。私の権利は鏹一文も人には譲りません」と。これを耳にした父は咳く「こいつは馬鹿かな。それともわしが馬鹿かな。ここなんだ、何かが狂っとるのは。今日、支配の甘露があっても、明日の苦酒が用意してあるのだぞ」と。その時大臣登場。父は息子に言う「ドルミアを使ってやれ、チャールズ。それには理由がある。お前はかれを信頼していない。それは間違っていない。しかし今度の件に関してはかれは頭が混乱している。そしてかれはお前から離れたがっている。その理由はわしにはよく分かっている。しかし今はそれを取り上げるな。かれを大臣

めておいてやれ⁷⁹」と。チャールズは父によってドルミアを押しつけられていることは充分承知しながら言う「君、僕を信じてくれ。尤も君が僕を公平に見れば、僕は父が君を僕に推賞する必要のない人間と思うだろう。私人としての僕の君に対する今迄の感情がどうであれ、これからの僕の広大な、未知の活動の分野では、そんな感情は僕から去ってしまうよ。今迄僕が君の近くで仕事に没頭したように、僕は自らの力でサルジニアの支配の仕事をする。けれども君の助けを必要とする。過去は忘れ、僕に仕えてくれ⁸⁰」と。父は言う「過去は過去として葬れ。わしが安全な館に入るのを助けてくれ。お前がドルミアと共に世界をあつと言わせる前になあ。ここに書類がある。わしの生活に必要なものとして、わしが取って置くべきものがここに書いてある。よく目を通してくれ。お前の出来得る限りは貰^もっておきたい。わしの必要経費も書いておいた⁸¹」と。チャールズは書類を読み言う「五千クラウン〱Crowns〱ではあまりにもお気の毒です⁸²」と。父は言う「なあに、田舎紳士にはこれで充分だ。それに大蔵大臣も時々は何とか。……いや、お前自身がすべて取り計ってくれ⁸³」と。チャールズは尚も書類を読み驚いて「テンデ〱Tende〱伯とは。これは何の意味ですか⁸⁴」と問う。父は答える「わしのことさ。そのわけを言おう。お前がほんの幼児の時のことさ。わしがある狭い山道を通り貫けて急にフランス軍の前に現われ勇敢に戦い打ち破ったんだ。その時、今のテンデのわしの領地にテンデの名を付けたんだ。丁度……⁸⁵」と。そこへドルミアが口を入れて「そうです。セバスチャン侯爵夫人をスピグノ〱Spigno〱侯爵夫人と名付けられましたなあ⁸⁶」と。チャールズは吃驚^{びつぱん}して「何んだって、ドルミア⁸⁷」と叫ぶ。父は大臣に向って「馬鹿者め⁸⁸」と叱り付け、息子に向って「それはわし自身の些細なことなんだ。すぐやめにしたんだ⁸⁹」と弁解する。チャールズは大臣に向って「君、君の今言ったことを説明してくれ⁹⁰」と言う。大臣は暴露^{ばくろ}して言う「それは今、私が名をあげました夫人との結婚のことなんです。この数週間極秘にしておったのですが、どうでもよいことではないと思っていたのです。しかし今はヴィクターは伯爵ですから何でもないのです⁹¹」と。チャールズは父に向って言う「これはいけません。言って下さい。かの女と結婚されたんですか。かの女と一緒に住みなんて、取り返しつかないことです⁹²」と。父は言う「どこが悪い⁹³」と。ポリゼナが夫に向って言う「あなた、これは本当に取り返しのつかないことです。これはあなたの認容範囲以外のことです。一日前ならこれを無理にも認めざるを得なかったかも知れませんが。でも今は何故これを認める必要がありますか。あなたは今は王家を救われた王なんです。伯爵のしたことはあなたに関係ありません⁹⁴」と。チャールズは話を変えて大臣に問う「スペインの要求はどうなったか⁹⁵」と。父が口を差し入れて「それなんだがなあ、チャールズ。わしは少し思慮が足りなかった。実に、人は年を取ると何もかもぶちこわしてしまう。わしはやりすぎた。しかしお前のような

ロバート・ブラウニングの悲劇「ヴィクター王とチャールズ王」

な若い頭なら、すぐにもサルジニアを困難から脱出させることができると思はれる。ドルミア、明日にでも新王に該事件の報告をしるよ」と。大臣はヴィクターに向きもせず「スペインの事件はこうなっています。最初幼少のカルロス〈Carlos〉がタスカニ〈Tuscany〉王位の正当な後継者であることを求めた時……」と言ひ出すとヴィクターは「たしか、この事件はまだ決っていないんだ。それは触れずに置くがよい。今は策略が必要なんだ」と言う。チャールズはドルミアに「そのことはよく知っている。知り尽くしている。それでその救済策は」と問う。大臣は「無論、救済策が必要です。しかしそれに旧王は一瞥さえも与えられません」と答える。ヴィクターは慌てて「救済策なんて全然ない。全然ないことが救済策なんだ。時が救済してくれる」と言う。大臣が「しかし、もし……」と言ひかけるとヴィクターは一層慌てて「最後にはわしがある。わしの考えている別の計画でなあ」と言う。大臣はヴィクターに向って「ああ、テンデ伯は再びヴィクター王となられるおつもりなんですね」と。ポリゼナはヴィクターの足元に身を投げて言う「今にも王冠を取り返すとおっしゃるの、言って下さい。私共は再びあなたの臣下になりますの。言って下さい。あなたの一言で決まりますの。王冠を取返すのは今でないという意味ですの。しかしあなたは吃度そうなさるに違いありません。そうなさりそうなのはあなたの身についています。それはあなたの性格の中にあります。そんな恥ずべきことを今なさろうと、先きでなさろうと同じです」と。チャールズは「ポリゼナ、何を言うか」と窘める。しかしポリゼナは言いつづける「一言で騎士達を呼び戻すことはできます。言って下さい。どんな将来の見込みがあり、どんな過去の実績があるからか言ひなさい。あなたがまだヴィクター王であることを言ひなさい」と迫る。ドルミアはヴィクターの心の中をはっきり言う「簡単に言えば、伯爵は退位したことを後悔されていると言った方がよいでしょう」と。自らのかけた罫を見破られた王は突然立ち上り退場する。実にポリゼナは封建時代の武人の妻として男勝りの女性の典型である。「ドルーズ人の祖国への帰還」〈The Return of the Druses〉のアナエル〈Anaël〉と好一对である。ダウデン〈Edward Dowden〉も言っている。「ポリゼナは厳肅な、毅然とした、賢明な、英知の權威を保持するチュートン〈Teutonic tribes〉族の十八世紀的女性の典型である。王の伴侶の後として、その感情と理性が共に勇敢に働くかの女は、王の協力者、助言者、また古い言い方をすれば夫の慰安者であることを強く、且つ素朴に自認している。事実、その実生活に於いて、気難しい息子のようなチャールズに対し、殆んど母性愛とも言うべき愛情と夫への愛情とが交り合っていたのである」と。

〔一〕 備

- (1) いづれもサルジニア王国の王城。前者はヴィクター王の王時代の居城。後者はチャールズ王の王子時代の居城。
- (2) Count St. Sebastian の未亡人の Anna Teresa Canali
- (3) 勇猛果敢な武人であるが、無節操、利己主義者、空惚けて虚偽を事とする性格。
- (4) 史実では、チャールズ王はドルミアに命じてヴィクターを反逆者として逮捕させ、リヴォリ城の監獄に閉じ込め、1732年に獄中で死ぬまで自由を奪ったことになっている。
- (5) Part I, II, 19—85
- (6) II, 91—99
- (7) II, 103—111
- (8) Concerning of the Reduction of the Fiefs のこと。
- (9) Part I, II, 112—125
- (10) II, 125—139
- (11) II, 139—149
- (12) 「サヴォイの貴族から金貨を強請る。するとその貴族は土地の農家から、お上から取られた金貨と同じ値の銀貨を強請る。すると農家の作男は銅貨を農家に献ぜねばならなくなる。そして一年経つと、サヴォイは困窮の塊となる。人民の憤怒が生じる。一人の人間がその怒りを受けて立たねばならなくなる。それは今の王である。しかもあなたは王ではない」(II, 202—210)と戦費で国費の窮迫している現状では、この方法しか道はないと言うのである。
- (13) 同盟国のスペインが敵側のオーストリアと手を結び王を窮地に追い込んでいる現状を伝え「気も狂わんばかりの王と惨めな人民を支える何が今あるか。しかもあなたは今王ではない。……然るにヴィクター王の治世は永がすぎる」(II, 228—232)の意。
- (14) ドルミアはセバスチャンと示し合せ、内政外政の失敗をチャールズに負わすため、ヴィクターを一時的に退位をさせることとしたが、それはヴィクターへの非難のほとぼりのさめた時を見計って、ヴィクターを復位させ、セバスチャンを正式の後とし、やがてかの女とヴィクターの間に生れる子を王の後継者とする企みをしていたので、チャールズが王と会う約束をしたので得たり賢しとその場を去ったのである。
- (15) Part I, II, 256—282
- (16) II, 260—281
- (17) II, 262—296
- (18) II, 297—302
- (19) II, 303—305
- (20) II, 306—312

ロズー・ノルカリハの巻「ヴィクター王の時代」

21 I. 313

22 I. 313

23 Part II, II. 1—12

24 ヴィクター王は外交の失敗から、サヴォイの領土を外国に明け渡した。しかし王は「わしの名声は残っている。わしの剣は残っている。然るにヨーロッパは、かれらがわしに与えた王冠を奪い取ろうとしている。王としてのわしの生涯はまだ閉ざされてはいない」(II. 26—29) と空威張りしているのである。

25 註④で述べたようなわけで、王に退位を進言したものの、王がかくも急に退位に踏み切るとは思わなかった。かれとしては、かれの手腕によって外交問題をもう少し好転させた後でと考えていた。然るに王が外交の難局の際に退位するのは、ドルミアの手腕を王は信頼していないと不満があった。一介の法律家の事務員から拾い上げ、大臣に引き立てた以上、自分をもっと信頼して欲しいとの希望があったのである。

26 王はドルミアの狡猾を知っている。ドルミアはセバスチャンと示し合わせて王の一時退位を勧めた。しかしチャールズが一度王となれば、人民に人気があり、且つ賢明であり、傍には男勝りの妻ポリゼナもいるので、王位は揺がぬものとなるとドルミアは考えるのだろう。そうなれば、かれはチャールズの味方となり、ヴィクターを捨てる男であるとヴィクターは考え、ドルミアの心を見抜いたのである。

27 「一人漕ぎの小船がガレー船<galliot>の立てた波の上でどんなに喜んだことか。小船は高く浮び上り、ガレー船そのものよりも上に出ていた。その時、大波が砕けて、ガレー船を恐ろしい深海の地獄の底に沈めてしまった。こんな時、今度は小船が海の暗い波と波の間の谷間から逃げることを考えないだろうか」(II. 71—76)

28 Part II, II. 66—85

29 II. 134—135

30 II. 135—138

31 II. 165—168

32 II. 169—180

33 「ここに世間をよく知っている知恵者がいます。その人は騙されるような人ではありません。しかしドルミアがその経験と権謀術数によってその人に教えます。私がその人の王冠を羨ましく思っていると教えます。そして私が私の妻と何かを企んでいると」(II. 181—187)

34 Part II, II. 188—193

35 II. 194—195

36 II. 196—197

37 II. 198—201

38 II. 201—205

39 II. 209—215

(40) Part II, I. 216

(41) II. 217—222

(42) II. 229—240

(43) II. 241—242

(44) I. 243

(45) II. 244—257

(46) II. 258—275

(47) II. 275—291

(48) いよいよチャールズが王となると今迄チャールズを愚者で王位につくには不適當と宣伝して来たことが嘘と分かり、人民からかれ自らが弾劾され、またチャールズが新王となると共に男勝りの妻ポリゼナが后となり、かれを罷免することは必定であることがひしひしと感じられ、自らの地位の不安を極度に恐れたのである。そのため、強いて反対の事態の起るようなことを口にするのである。

(49) Part II, II. 302—305

(50) II. 305—306

(51) II. 307—309

(52) II. 312—313

(53) I. 316

(54) II. 316—317

(55) II. 313—338

(56) 「私達がライン河の四阿^{あづまや}に着く時、私があの方を褒^ほめたために、あの方が灰色の目を暗闇^{くらやみ}の中で大きく開き、美しい薄暮の中をご覧になるとしたら、その時あの方どんなに美しくお見えになることでしょうか。リヴォリよ、左様なら、……さあ私の使う言語を教えましょう。私はイタリア語など話せよと言われても話しません」 (II. 341—348)

(57) Part II, II. 348—349

(58) II. 349—350

(59) II. 350—352

(60) II. 354—359

(61) I. 367

(62) II. 367—369

ロビン・フッドの物語「マイクラーとチャールズ」

ロビン・ウィリアムズの映画「チャーターハウス・リット」

- (63) Part II, II. 370—371
- (64) II. 371—373
- (65) II. 374—376
- (66) II. 385—387
- (67) I. 388
- (68) 今迄冷酷にしていたのは仮面で、実はそうではないとずるいことを言ったところ。
- (69) Part II, II. 388—394
- (70) II. 395—398
- (71) I. 418
- (72) II. 419—427
- (73) II. 428—431
- (74) II. 435—438
- (75) I. 439
- (76) II. 440—446
- (77) II. 447—452
- (78) II. 452—455
- (79) II. 469—474
- (80) II. 475—484
- (81) II. 486—493
- (82) I. 494
- (83) II. 495—497
- (84) I. 497
- (85) II. 498—502
- (86) II. 502—503
- (87) I. 503
- (88) I. 503
- (89) II. 503—504

090 I. 504

091 註④で述べたドルミアの考えから今はチャールズの味方をしておくがよいとのドルミア流のずるい考えから。

092 ヴィクターがセバスチャン夫人と結婚すればその子が生れる時、王位継承問題がからむ重要問題という意味を述べ、チャールズのご機嫌を取る言い方。

093 Part II, II. 505—508

094 II. 509—511

095 I. 511

096 ヴィクターが王で絶対権があったから。

097 Part II, II. 512—516

098 I. 517

099 II. 517—512

100 II. 522—524

101 II. 525—526

102 II. 526—527

103 II. 527—528

104 II. 528—529

105 I. 529

106 ここで復位の意図をうっかりもらす。

107 Part II, II. 530—531

108 註⑨と同様の気持でヴィクターの意図を暴露する。

109 Part II, II. 532—533

110 II. 533—538

111 I. 539

112 II. 539—541

113 II. 541—542

114 ブラウニングの悲劇の一つ。大手前女子大学編集12号拙著「ドルーズ人の祖国への帰還」参照。

115 Edward Dowden : The Life of Robert Browning, p. 64 参照

〔五〕参考文献

ロビン・フランク・ハリスの著書「ヴィクターとエドワード・ドゥーデン」

ロビン・フッドの物語「ロビン・フッドの物語」

1. Stopford A. Brooke : Browning
2. William Sharp : Life of Robert Browning
3. Edward Dowden : The Life of Robert Browning
4. Arthur Symonds : An Introduction of the Study of Browning
5. Edward Berdoe : The Browning Cyclopadia
6. Mrs. S. Orr : Handbook to Browning's Works
7. Charlotte Porter and Helen A. Clarke : King Victor and King Charles